

53 地域防災訓練への障害者の参加

研究所 障害福祉研究部 北村弥生
学院 手話通訳学科 宮澤典子、越後節子

【目的】障害者が地域防災訓練に参加し、災害時に地域および避難所で快適な生活を送るための方法および地域との交流状況、特に、前年度からの発展を明らかにすること。

【方法】所沢市の地域防災訓練（平成26年8月30日）を実施した3小学校に、手話通訳者1名、ボランティア組織代表1名、学生10名（筆記、ガイドヘルプ、車いす押し、記録）を同行して、聴覚障害者2名、視覚障害者4名、車いす利用者3名の合計9名に参加を依頼し、参加状況を参与観察した。車椅子介助者1名は自分で介助者派遣を事業所から有償で受けた。2年継続した参加者は2名であった。また、地域防災訓練参加にあたっての同行者の有効性と課題を、参加した障害当事者と同行者合計21名と自主防災組織役員5名に対し、面接法により調査した。また、訓練に先立って、同行した学生には、市内のボランティア組織会員2名を講師として、視覚障害者と車椅子利用者に対する介助方法の研修（約1時間）を提供した。

【結果】（1）前年度に比べて、地域からの支援に進展が観察された。第一に、車いす利用者に対しては、体育館入り口の段差（3段）で、派遣した同行者に代わり地域住民が、町内会長の調整により、車いすの昇降の手助けをした。第二に、聴覚障害者用の筆記具（マジックと画用紙3セット）を自主防災組織が準備した。第三に、事前の訓練説明会に、聴覚障害者と手話通訳者と共に参加したことから、当日の場内アナウンスで両者の参加が全員に伝えられた。

（2）障害者による防災訓練への参加に進展が観察された。第一に、車いす利用者が消火器操作訓練に参加した。実際に、車いす利用者が消火作業を行う必要は低いと考えられるが、参加者に存在を知らせる点では有効であったと考えられる。第二に、担架での輸送訓練で、担架に乗る役と運ぶ役の両方に聴覚障害者が参加した。

（3）新たな配慮の必要性の発見があった。弱視者では、通常的生活では、手引きを必要としないが、目印のない広い校庭（防災訓練の会場）では、手引きあるいは会場の状況を示す工夫を必要とすることが指摘された。

（4）前年度参加者のうち1名は、今年度は防災訓練ではなく納涼会に参加し、地域との交流が発展したことが報告された。

【考察】2年間の試行では、事前に自主防災組織に仲介者（研究者）が依頼をした場合には、地域住民からの支援が増えたことを実証した。しかし、依頼予定事項と実現事項は一致したわけではなく、時間の経過とともに支援の量と質がどのように増加するかを明らかにすることは今後の課題である。また、障害当事者と地域住民が直接に支援の授受について交渉を継続する技法の開発も今後の課題である。